
ハヤテのごとく！～史上最悪の危機！ 天王州 アテネをぶっ倒せ！～

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！〜史上最悪の危機！ 天王州 アテネをぶっ倒せ！〜

【Nコード】

N8552K

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

その日、目が覚めたヒナギクは蚊になっていた。——この物語は雑魚侵略者の世界観で進めていきます。

（前書き）

これは主人公のヒナギクがハヤテを幸せにするために戦う物語です。
終盤で彼女がとんでもないことになります。

とある夏の朝。暑さで目を覚ました私は感嘆の声を上げた。
手足が細く、背中に羽が生えていたのだ。

鏡台の前に羽を羽ばたかせて飛んでいくと、鏡に一匹の蚊が映っていた。その蚊は私と同じを動きをする。つまり、私は蚊になってしまったのだ。

「ヒナちゃん、いつまで寝てるの？」

その声と共に階段を登る足音。

やがて足音の主が部屋の前までやってきて扉を開けた。
入ってきたのは茶髪の若い女性。私のお義母さん^{かあ}だった。

「あれ？」

私は飛んで部屋を出た。それと同時にお義母さんが扉を閉める。

「ヒナちゃんどこに行っちゃったのかしら？」

疑問符を浮かべながら階段を降りていくお義母さん。

玄関に立ち寄り並べてある靴を見据える。

「靴はあるのに変ね」

「お義母さん、私はここよ」

しかしお義母さんには聞こえていないのか、その場を離れてリビングへ入っていく。

食卓には既に料理が用意されていた。

空腹で音が鳴るのが分かった。

私は席に着いてご飯を食べ始めたお義母さんの前まで飛んでいった。

「あら嫌だ」

お義母さんが手で私を追い払う。

「後でバルサンたかないとね」

バルサン。それは日本の大手家庭用品メーカーのライオンが製造及び販売している殺虫剤。今の私は蚊であるため、それを使われた

ら確実に昇天だ。

この家に居ては拙いと思った私は出口を探す。
窓に隙間が無いか家中を徹底的にチェック。

「ここからなら出られそうだわ」

私は開けっ放しになっていたトイレの窓から外に出た。

さて、これからどこへ行こうか。

特に行く宛てもなく街を彷徨さまよっていると、黒いスーツにリボンネクタイをした水色短髪の女の子みたいな顔をした男の子と金髪縦口イルの端正な顔立ちの少女が楽しそうに会話をしながら歩いているのを見つけた。

「あれは……」

私が密かに思いを寄せている執事の綾崎　ハヤテくんと白皇学院の理事長を勤める天王州　アテネさんだった。

「ハヤテくん！」

私はハヤテくんに近付いてその名を呼んだ。

立ち止まり様に振り返るハヤテくん。

「どうしたんですの？」

「今誰かが僕を呼んだ気がして」

「私には何も聞こえませんでしたわ。きっと空耳ですわ」

首を傾げるハヤテくん。その横に居る天王州さんが私に向かって不適に微笑む。

「ハヤテ、急がないと遅刻しますわよ」

「うん」

通学の途中だった二人は学校に向かって歩き出す。

「ハヤテくん！」

立ち止まるハヤテくん。

「やっぱり聞こえたよ」

天王州さんが「ちっ」と舌打ちをした。

きつと彼女は何かを知っている。

「どこに居るんですか!？」

辺りを見渡すハヤテくん。私は彼に近付いて言う。

「ここよ」

言葉を頼りにハヤテくんが私を見つける。

「蚊？」

「私は貴方と同じ白皇学院に通う生徒会会長の桂　ヒナギクよ」

「ええ！？」

驚き飛び退くハヤテくん。その横で天王州さんが私を睨む。

「天王州さん、貴方何か知ってるわね？」

「ハヤテは私の物よ」

「アーたん、何の話？」

「貴方は黙ってて下さい」

言われて黙り込むハヤテくん。

「ずいぶんと醜いお姿になりましたわね、桂さん」

「やっぱり貴方何か？」

「貴方に呪いをかけさせていただきました」

「何ですって！？」

「いったいどんな呪いをヒナギクさんにかけたの？」

「黙れと言っただろ！」

天王州さんの怒号に怯えるハヤテくん。

「私たちの前から消えていただけます？　そして二度とハヤテに近付かないと約束して下さいませんか？」

「何よそれ……」

「素直にこちらの要求に従えば貴方にかけた呪いを解きますわ」

「……仕方ないわね」

天王州さんが目を瞑って呪文を唱えると、私は白煙と共に人間の姿になった。

「行きますわよ、ハヤテ」

踵を返して学校へ向かう天王州さん。その後をハヤテくんがついて行く。

天王州さんがハヤテくんを独占したい気持ちは分からなくもない

が……。

「待つて！」

天王州さんは振り返った。

「消えろと言った筈だ！」

怒号を浴びせられた。

「どうしてハヤテくんに関わっちゃダメなの？」

「どうして？ ハヤテの気持ちが他の女に揺らいだら困るからよ」

「それは見物ね」

「私の恋路を邪魔するというなら覚悟しておきなさい」

自信に満ちた表情で言い放つ天王州さんに対して怒りを覚えた私は誓った。彼女とハヤテくんの仲を引き裂いて彼を奪ってみせると。

「望むところよ。ハヤテくんは私が頂くわ」

「ヒナギクさん、それってどういう……？」

まだ分からないのかこの男は！

「私は貴方がことが大好きなの」

「えっ……？」

戸惑うハヤテくん。

「ハヤテは誰にも渡しませんわ」

私と天王州さんは互いに睨み合って火花をちらつかせた。

白皇学院の体育館に、リングが設置されていた。

「何これ……？」

今朝、教室に置かれていた手紙には、体育館に来いとあった。

館内には生徒たちが集まっており、リングを囲んでいた。

「それではこれより、恋する乙女の戦いを始めたいと思います！」

リングの上でマイクを手に喋っているのは大人びた少女の朝風あさかぜ

理沙りさだった。

「勝者には綾崎 ハヤテくんを束縛及び所有する権利を与えます！

参加は男女共に自由！ 皆さんふるってご参加下さい！」

理沙がリングから降りていく。その代わりに天王州さんがマイクを手に上った。

「皆さんお早う御座います。今し方朝風さんから話があったように、皆さんにはこれからハヤテをかけた全力のバトルをしてもらいます。優勝者には無条件でハヤテを好きに出来る権利を与えます。ハヤテを独占したい方はどうぞご参加下さい。尚、相手を殺してしまった場合は失格、というか殺人罪で捕まりますのでご注意下さい」

こんなバカげた試合などやらせられるか。

私は説明を終えて降りようとする天王州さんの下へ駆け寄った。

「いったいどういつもり!？」

「売られた喧嘩を正々堂々で行おうとしてるだけよ。優勝者にハヤテを譲るわ」

「こんなことが許されると思って？」

「文句があるなら出ないで下さる？」

「くっ……!」

これ以上は言えなかった。

でもこれはハヤテくんを奪うチャンスなんじゃないか。私の心に邪な気持ち^{よこしま}が芽生えた。

私はリングを降りるとエントリーに向かった。

受け付けには水色長髪の女の子とニコニコした表情の少女。理沙と同じく生徒会役員の花菱^{はなびし} 美希^{みき}と瀬川^{せがわ} 泉^{いずみ}だ。

私が二人の前に立つと美希が驚いたような表情をする。

「ヒナ!? って、うわあっ!」

驚きすぎて椅子から転げ落ちた。

「プッ!」

私は思わず吹き出した。

「笑うな!」

直ぐに座り直し、机の上に置かれた書類を示す。

「ここに学校名と名前と学年とクラスと学籍番号!」

「うん、それは見れば分かるけど何で学校名まで?」

「この戦いは他校生の参加も認められているんだ」

「ええ！？」

今度は私が驚いた。

その時、背後で聞き覚えのある声が。

「ヒナさん」

振り返ると私と同じ商店街の喫茶店でアルバイトをしている親友の西沢 歩にしざわ あゆむが立っていた。

「歩！？ まさか貴方も！？」

「ええ、チラシを頂きましたから」

「そ、そう」

あんの糞アマが……！

私は横目に解説者席の理沙の隣に座る天王州さんを睨め付けた。

「私、絶対に負けませんからね。必ず優勝してハヤテくんを私の物にしてみせます！」

「望むところよ！」

「どうでもいいが早く書け」

私は書類に必要な事項を記入してエントリーした。

そしてハヤテくんをかけたバトルが開始された。

一戦目は他校の女子と女子。ゴングが鳴り響くと同時に互いに格闘を仕掛ける。

双方の拳と拳のぶつかり合い。更に光線技まで出る始末。もうこれでは武道会。

結果は前者の勝利だった。

こうして武道会は順調に進み、とうとう私の番が回ってきた。相手は埼玉で鬼頭のサヤという名を轟かせている県内で最強の不良少女だ。何でも喧嘩無敗の中学生らしい。エントリーの理由は小耳に挟んだ情報によると今の執事が全然使えないので優秀な者を新しく捜しているということだ。

育島・アンジェリカ・沙夜という頭に二本の角を生やした長い金髪の少女がゴングと共に先制。

「ぐっ！」

私は重たいパンチを腹にもらって蹠踉めいた。その隙に連続攻撃を叩き込まれる。

初戦でいきなり最強の敵と遭遇。勝機は見いだせない。

「手も足も出ないか？」

沙夜が私を蹴り飛ばす。

私はリングの周りに張られたビニールにもたれ掛かる。

「なかなかやるわね。でも負ける訳にはいかないの！」

気合いを溜め、金色のオーラを放ち、桃色の髪が逆立って眉毛と共にオーラと同じ色に染まる。

「おっと！？ 何と桂選手がスーパーサ。ヤ人になった——っ！」

「ウォーミングアップはここまで。本気で行かせてもらっわ！」

私は沙夜の懐へ一瞬で駆け込みラッシュを仕掛け、あっという間にグロッキーへ追い込んだ。

「桂選手強い！」

マイク越しにスピーカーから聞こえてくる理沙の声。

「なかなかやるじゃねえか……。だがこっちだって……！」

沙夜の様子に変化が現れた。

「うおおおお！」

雄叫びを上げながら猛攻を仕掛けてくる。

先ほどより速度が増しており、避けるのが精一杯だ。

「おらおらおらおら………！」

隙を見つけて反撃。

「ぐわっ！」

倒れる沙夜。

「お前はよくやった。また今度やろうな」

私は高く飛び上がりビッグバンア。ツクを放った。

「ぐおわ！」

沙夜、戦闘不能。

毛の色を戻し、我に返った。

「高いのラメ——ッ！」

私はリング外へ落下した。

それから暫くすると、二回戦が始まった。

相手は金髪ツインテールの女の子だった。彼女は以前ハヤテくんが仕えていた三千院 ナギ。練馬に巨大な屋敷を構える三千院家のお嬢様だ。

「ふっ、誰が相手であろうと私は負けない！ 勝ってハヤテを取り戻す！」

ゴングが鳴り響いた。

勝てると余裕をかましていた私は本気の一パーセントも出さずに戦いを仕掛けた。だが、ナギは予想以上に強かった。手を抜けば確実に破れる。いったいどんな修業をしてきたというのだろうか。

「うん？」

ナギの体からコードが伸びていた。その先を辿るとリモコンを持ったメイドのマリアさんが居た。

私は手にした木刀でナギの服を引き裂いた。

「きゃあ！」

露出した体には、某ゲーム会社が開発したリアルで格闘ゲームが楽しめる人が着用するスーツを纏っていた。そのスーツは着た者をリモコンによって全身を操れ、どんなにひ弱な人間でも最強の格闘家に出来るという代物。

「ちよつと審判！ これは反則なんじゃない！？」

「えっと……ルールによると相手を殺さなければ何でもありだそうです」

「そういうことだ。マリア！」

マリアさんの指令でナギが猛攻を仕掛けてくる。

「ならば司令塔をぶっ潰すまでよ！」

私は場外へ飛び出した。

「何！？」

「桂選手、リモコンを握るメイドさんへ向かっていった！」

「マリアさん、覚悟して下さい!」

私はマリアさんに攻撃を仕掛ける。だが、全て見切られてかわされてしまう。

「お前の相手はこの私だ!」

私の攻撃を難なくかわしながら、ナギを使って襲ってくるマリアさん。

「ヒナギクさん、コードを切れば終わりです!」

観衆の中からハヤテくんの声がした。

私は愛刀あいとうの正宗で司令塔とスーツのコードを切り裂いた。

「しまった!」

ナギの攻撃が止まる。

「覚悟するのよ?」

私はナギに笑みを浮かべてみせた。

恐怖でプルプルと震えるナギ。

「おりゃあ!」

ナギの頭を正宗で殴打。

「うつ!」

気を失って倒れるナギ。私の勝利だった。

こうして二回戦をクリアした私は三回戦と四回戦を余裕で突破してファイナルラウンドまでやってきた。

リングに立って敵と向かい合う。相手は天王州さんだった。

因みに歩は一回戦で敗退していた。

「ここまで来るとは大したものね。褒めてあげるわ」

でも——と続ける天王州さん。

「貴方はここで負ける」

「それはどうかしら?」

ゴングが鳴り響くと同時に天王州さんが先制。気が付くと私は追い詰められていた。

「くっ……!」

「さっきまでの余裕はどうしたんですの?」

手も足も出ない私に容赦なく攻撃してくる天王州さん。

「ヒナギクさん、加勢しますよ」

「え？」

ハヤテくんがリングに入ってきた。

「審判！？」

「優勝賞品自信の参加もルール上問題ありません」

「そうじゃなくて乱入はありなの！？」

「乱入もオッケーです」

「ハヤテ、これはどういうことですか？ 私に加勢するならまだしも、この女に協力するなんて」

「僕はもう君の側に居るのが嫌になったんだ」

「何ですって？」

「僕は昨日ヒナギクさんに好きと言われて一晩考えたんだ。ヒナギクさんなら僕に尽くしてくれるんじゃないかって。でもアーたんは僕に何もしてくれない。その上君は面倒なことを全部僕に押し付けて。僕はそれが嫌なんだ！ だから僕は、ヒナギクさんを優勝させて、ヒナギクさんの物になる！ そしてヒナギクさんの気持ちに答える！」

「ハヤテくんの答えって何？」

とても気になった。

「それは……えっと……」

ハヤテくんの頬が赤らんだ。

「焦れたいわね。早く答えなさい」

「ですから、その……」

そんなに言いにくいことなのかよ。

「三秒以内に答えないと殴るわよ」

私はカウントダウンを開始した。

「三」

ハヤテくんは言わない。

「二」

ハヤテくんはまだ答えない。私は彼の頭を殴った。

「痛！ まだ三数えてないですよね！？」

「五月蠅いわね！ つべこべ言わずに答えなさい！」

「ひえ！」

恐怖で竦み上がるハヤテくん。そんなに怖かったのだろうか。

「ぼ、僕……」

「うん？」

「僕も……やっぱ言えません！ 言わなくなつて答えは分かつてるでしょ？」

「分からないわよ」

分かつてるけど。

「……………」

黙り込むハヤテくん。何だかイジメたくなつてきた。

「お話はもういいかしら？」

待たされていらついている天王州さん。

「ハヤテくん、お願いだから答えて。私は貴方の口から直接聞いたいの」

「……きです」

「ああ？」

「す……です」

「聞こえないんだけど」

「僕も、ヒナギクさんのことが好きです！」

ハヤテくんの顔が真っ赤に染まっていくな。観衆の一部の男が怒号を上げた。

「いつから？」

「あの日、校庭の木の前で初めて会つた時からです」

「そんな前から！？ ていうかそれ一目惚れじゃない。どうしてその場で言わないのよ？」

「初対面の人にいきなり好きになつたので付き合つて下さいって言えますか？」

「そ、それもそうね……」

「ハヤテ、ミコノスでのあれは嘘なの？」

「いや、確かにあの時はアーたんのことが一番に好きだったよ。けど今は違うんだ」

「何だと……！」

激昂した天王州さんが我を忘れて私たちに攻撃を仕掛けてきた。

「「うわあー！」」

私たちはギリギリでかわした。

「ヒナギクさん、アーたんの実力は確かです。僕たち二人の力では勝てないでしょう」

「じゃあどうするのよ？」

「アレをやります」

「アレってまさか……！」

「そう、アレです」

「嫌よあんな恥ずかしいの！」

「ですがアーたんに勝つにはその方法しか無いんです！」

「だからってそんなことこんな大勢の前じゃ無理よ！」

「貴様ら、ごちゃごちゃ五月蠅いんだよ！」

天王州さんの鉄拳が飛んでくる。だが私たちは何とかかわす。

「お願いします！ 僕とアレをやって下さい！ じゃないと負けて僕はまたアーたんの所有物になっちゃいますよ……！」

「私たちが負ける？ 負けてハヤテくんが天王州さんの所有物に？」「ハヤテくん、アレをやるわよ！」

「ボーン！」——とハヤテくんが煙幕を作り、私たちは天王州さんから離れた。

リングから今いる体育館の壇上まではかなりの距離がある。このデスタンスなら十分だろう。

「ハヤテくん、呉々も失敗しないようにね」

「ヒナギクさんの方こそ」

私たちはアレの準備に入った。

「フュージョン！ ハッ！」

刹那、私たちは光に包まれ、互いの体がゆつくりと重なり、一人の戦士が生まれた。

「何だ貴様は！？」

「俺はハヤテでもヒナギクでもない。お前を倒す者だ！」

「笑止！」

私たちは迫り来る天王州さんに目にも留まらない速度で接近し猛攻を浴びせる。

「ぐっ……！」

「おらおらおら……！！」

反撃のチャンスすら与えず、ハヤテくんの速力と私の攻撃力で天王州さんを圧倒する。

「いやあっ！」

鋭い蹴りで天王州さんを遠くへ吹っ飛ばす。

「とどめだ！」

私たちは先回りをして天王州さんを床へ叩き落とし、とどめの必殺光線を放った。

「ぐっ！」

受け止める天王州さん。

「こんなもの……！」

天王州さんが光線を放って押し返してきた。

「なっ！？」

ぐいぐいと私たちの光線が押し返される。

「ぐわあ！」

天王州さんの光線を浴び、落下して分離する。

「フュージョンしてもダメじゃない」

「策はまだあります」

ハヤテくんがイヤリングを取り出した。

「それは？」

「この日のために牧村先生に作ってもらったポタラです。僕と合体

して下さい」

「ちよっ、やめてよ！ 戻れなくなるでしょ!？」

「合体すれば負けても僕たちは永遠に一緒ですよ」

「勝たなきゃ意味が無いでしょ!？ 貸しなさい!」

互いに立ち上がり、ポタラを受け取る。

「本当にいいんですか？」

「何が!？」

「合体したら僕たちは元には戻れませんよ」

「そのつもりで用意したんじゃないの？」

「分かりました。それを右の耳につけて下さい」

言われた通り右耳にポタラをつける。

「こっお？」

横でハヤテくんが左耳にポタラをつけた。すると私たちの体は引き寄せ合って激突した。

「痛!」

そして私たちは合体して一人の戦士となった。

「パワーが漲ってくる……」

「今度は何なんだ!？」

「ハヤテとヒナギクが合体して、ヒナテといったところかな」

「次から次へと姿を変えやがって!」

天王州さんがいつの間にか手にしていた真剣で切りかかってくる。

私たちは木刀の正宗で受け止めた。

「貴様……私のハヤテを返せ!」

「この勝負、私が勝ってハヤテくんをもらう!」

私たちは天王州さんを押し返し、直ぐに正宗でその体を切り裂く。

「ぐわあ!」

血飛沫を上げる天王州さん。

「くっくく……お前を取り込めば強くなれそうだ」

そう言って天王州さんが光線を放つ。

「バリア!」

身を守ろうと私たちはバリアを張った。すると光線が当たった瞬間に私たちはチヨコレートになってしまった。

「いただきます」

天王州さんが私たちを拾って口の中に入れ、咀嚼して飲み込んだ。食堂を抜けて胃袋へとやってきた私たち。

「バリアを解除したらどうなるんだ？」

バリアを解除してみると、私たちの体は二つに戻ってしまった。

「何よこんなもの！」

私は外したイヤリングを握り潰して破壊した。

「ここは魔神ブウ悪の体内かよ！？」

「ヒナギクさん、落ち着いて。兎に角ここを出ましょう」

「でもどうやって？」

「人間の体内への出入り口は二つ。一つは今入ってきた口、もう一つはこの先の……」

考えたくもなかった。

「それと、途中で本物のアーたんを助けましょう」

「どうということ？」

「さっき戦ってたアーたんは、彼女が生み出した闇人格。まあ原因は僕なんですけど」

「ひょっとしてこの天王州さんは魔神ブウ善が犬を殺されて怒った時に出て来た魔神ブウ純粹悪？」

「正にそれです。そしてチヨコにして善を食べてしまったんです」

「じゃあ善を助けたら悪は純粹になるんじゃない？」

「かも知れません」

「棄権しておけばよかったわ。純粹になんか勝てるわけないわよ」

「ヒナギクさんなら勝てます！」

「どこから出て来るのよその自信は？」

「兎に角、アーたんを搜しましょう」

「そうね……」

私たちは胃を抜けて腸へと侵入した。

「見つからないわね」

「そうですね」

その時、どこからともなく叫び声が聞こえた。

「ここから出さない！」

天王州さん善の声だった。

「この向こうみたいです」

ハヤテくんが指し示す先には肉の壁があった。

「下がって」

私はハヤテくんを下がらせて正宗を振り回した。

シャキシヤキーン！——小気味いい金属音と共に肉の壁に大きな穴が開いた。

「それ木刀ですよね？」

無視。穴の向こうに肉に包まれた天王州さんの姿があった。

「アーたん！」

私たちは肉に包まれた天王州さんに駆け寄る。

天王州さんは私たちを見ると涙を浮かべた。

「二人とも、私を助けにきてくれたのですね」

「いや、助けに来たというよりチョコレートにされたと言った方がいいわね」

「貴方たちもなんですか？」

「ヒナギクさん」

「うん」

私は足場と天井から伸びる肉のロープで固定された肉袋を切り裂こうとした。だがしかし、思わぬ邪魔が入る。

「そいつに触るな！」

その声に振り返ると、先ほどまで戦っていた天王州さん悪の姿があった。

「ハヤテ、私の下へ来い」

「嫌だ」

ハヤテくんがそう答えると、四方から肉のロープが伸びてきて彼

に巻き付いた。

「仕付けが必要みたいだな」

「ああああ！」

私は天王州さん悪に切りかかった。が、木刀を回し蹴りで弾かれ、バックキックを食らって後方へ吹っ飛び肉の床に転がった。

「くっ……！」

「お前には死を与えてやる」

天王州さん悪が真剣を手にもちらへ歩み寄ってくる。

「よく見るハヤテ。これがお前を求めたこの女の末路だ」

天王州さん悪が真剣を振りかぶる。

「やめろ！ やめてくれアーたん！」

「ならばこの私にかしずけ」

「それは……」

「じゃあこの女は抹殺だ」

「くっ……！」

「どうする？」

「……分かった」

「ハヤテ……」

「ハヤテくん……」

天王州さん悪は剣を引く。

「この女は見逃してやろう。だがそいつは別だ！」

「白桜！」

私の声に応えて体内から真剣が出現する。

「ヒナギクさん、それは通りすがりのヒーローさんの！ 人の物を

盗んじゃダメじゃないですか！」

「貴方バカ？」

私は立ち上がり白桜を構える。

「私とやろうと言っのか？」

「私はお前を倒して天王州さんを助ける！ 覚悟しろよ、このガン細胞野郎！」

「ヒナギクさんがぶちギレてる!？」

「私に楯突いたことを後悔させてやる」

「正宗！」

だが正宗は動かない。

「残念だったな。この空間は私の意のまま。つまりこういうことだ」

天王州さん悪が正宗に手を伸ばす。

「私にかしずけ、正宗」

それに応えて正宗が天王州さん悪の手に収まる。

「私を裏切るの!？」

天王州さん悪は正宗を頭上へ放り投げた。

正宗が光を放って一人の侍に姿を変えた。

「それが正宗の本体？」

正宗は木刀を鞘から抜き攻撃を仕掛けてきた。

「当たらないわよ」

振り下ろされた木刀を難なくかわす。

「正宗、貴方は私を誰だと思ってるの？」

正宗の目が赤く輝く。

「フン！」

「しまっ……！」

正宗が木刀で私を吹っ飛ばした。

「ぐわあ！」

私の体が肉の床を数回バウンドする。

「ヒナギクさん！」

「くっ……！」

私は白桜を杖代わりに立ち上がる。

「言い忘れてたわ。この空間では私以外の全てが無力となる。どんなに強くとも体力を奪われていくのよ」

天王州さん悪の言う通り私は既にグロッキーだった。この空間に入った時から感じていた不思議な力。それが私の体力を吸い続けていたのだ。

「そして奪ったエネルギーは全て私のものになる」

「ご主人様、どう致しますか？」

「そうね……。殺しちゃって」

「御意！」

正宗が立つのもやっとな私に詰め寄ってくる。

「さらば貧乳女」

その時、私の中で何かが切れた。

「何て言った？」

「聞こえなかったか。もう一度言ってやる。さらば貧乳女」

「私の一番気にしていることを……！」

「ヒナギクさん、僕は小さいのが好きですよ」

「へ？」

沸々と沸き上がっていた怒りが一気に冷める。

「ちよつとハヤテ！？ 貴方のせいで希望が絶たれましたわよ！」

正宗が木刀で私の体を切り裂いた。

「ぐわっ！」

夥しい量の血飛沫。

「このままでは桂さんが死んでしまいますわ！」

仰向けに倒れる私の体。背中が肉の床に着くまでがスローモーションのように感じられ、その僅かな時間に沢山の思い出が走馬灯のように再生される。

楽しかった高尾山ハイキング、楽しかったハヤテくんとの初デート、楽しかった海外旅行。もう思い残すことは何もない。ハヤテくんが私を好きと言ってくれただけで十分幸せだった。さようなら、ハル子、愛歌さん、泉、美希、理沙、ナギ、お義父さん、お義母さん、お姉ちゃん……。お姉ちゃん？ 私が死んだらお姉ちゃんはどうか？ 金の猛者で飲んだくれのあいつのことだ。私が居ないことをいいことにユニセフ募金などと称して集めたお金を酒代に使うに決まっている。挙げ句の果てにはそっち系の人たちに借金をする可能性だって有り得る。それに私が貸した五万円もまだ返してもらっ

ていない。

「――って、死ねるか！」

私は勢いをつけて体を跳ね上げて着地した。

「ヒナギクさん化け物だ……」

「この死に損ないが！」

正宗が木刀を振るう。

私は白桜で受け止め、木刀を奪い取った。

「返してもらわよ！」

二つの刀で正宗を切りつける。

「ぐおっ！」

「目を覚ませ！」

正宗の腹に白桜の剣先を突き刺した。

「ぐはっ！」

我に返る正宗。

「私はいったい？」

「あいつに操られていたのよ」

天王州さん悪を見やる正宗。

「そうか。その傷は私がやったのか？」

「うん」

「操られていたとはいえすまないことをした」

「いいわよ別に」

「お詫びに私の力をフルに引き出そう」

「貴方にいったいどんな力が眠ってるのよ？」

正宗は光となり木刀の中に消えた。

『白桜と合成させるのだ。後ろに壺があるだろう』

私は後ろを向いた。そこには確かに壺が置かれていた。

『それは合成の壺と言ってあらゆる武具を合成して新たな武具を作り出す。これに私と白桜を入れれば戦国時代にて伝説の剣豪ヒナギクが使っていた伝説の刀であるエクスカリバーが出来ようぞ』

「こんな刀より小さな物体に入るわけ…… あった！」

壺はあっさりと二つを吸い込んだ。

「で、取り出せばいいのね」

私は壺の中に手を入れた。しかし刀と思しきもの入っていないなかった。

「ちよつとどういうこと!？」

壺を持ち上げて揺さぶるが音はしない。中を覗くと空っぽだった。

「何よこれ!？」

私は壺を肉の床に叩きつけた。

壺はボインと跳ね上がり、私の頭にゴンと落ちてきた。

「痛!」

パリンツと壺が割れて中から黄金に輝く聖剣エクスカリバーが出現した。

私はエクスカリバーを拾おうとしたが、重くて持ち上がらなかった。

「何ですよ!? 伝説の武器だから勇者じゃないと装備出来ないとか!？」

「ハヤテ、私たちのエネルギーを全て彼女に与えるのですわ」

「そうか。ヒナギクさんの体力が限界を超してるから持てないのかようし!」

ハヤテくと天王州さんが自分の体力を私に全て注ぎ込む。

「軽くなった!」

私はエクスカリバーを持ち上げて天王州さん悪に向かい構えた。

「無駄なことを」

「無駄かどうかはやってみなきゃ分からないでしょ!？」

私と天王州さん悪は互いに駆け出し剣を振るった。

キン!——エクスカリバーとただの真剣がぶつかり合う。

「ふんっ!」

私は天王州さん悪を蹴脚で吹っ飛ばした。

「食らいなさい!」

エクスカリバーを振るい、真空波を巻き起こした。

真空の刃が天王州さん悪に迫る。

「ぎゃあっ！」

夥しい量の血飛沫と共に倒れる天王州さん悪。

「ヒナギクさん、今の内に！」

私は天王州さんを固定する肉のロープに切りかかった。

「やめろ！ そんなことしたら私が私じゃなくなる！」

「聞く耳持たん！」

天王州さんを固定していた肉のロープを切り裂き、彼女を肉袋の中から助け出した。

「うわああああ！」

天王州さん悪は漆黒の光の粒子となって消え去った。

「えい！」

ついでにハヤテくんのロープも切り裂く。

「脱出するわよ！」

私たちは腸を進み尿道へとやってきた。

「何で尿道なんですか？」

「お尻は嫌よ。ウンコが臭いから」

「そんなことより何か聞こえませんか？」

立ち止まって耳を澄ますと、背後から何かが近付いてくる音が聞こえた。ザーッと勢い良く滝の水が流れ落ちるようなそれだ。

「まさか……！？」

やがてその音の主が姿を現した。それは黄色くて塩辛い液体。

「逃げる——っ！」

私たちは一斉に出口目指して走った。もう無我夢中だった。

「きゃあ！」

天王州さんが躓いて転んだ。

「天王州さん！」

「拙い！」

私たちは迫る小便に飲み込まれて流された。

もうすぐ尿の出口。そこに黒い紐のようなものが沢山垂れ下がっ

ているのが見えた。

私たちは出口から飛び出すと共に紐に掴まった。

「ヒナギクさん」

「何？」

「下は決して見ないで下さいね」

「下に何かあるの？」

私は下を見た。

「高いの嫌！」

私は紐を手放そうとした。

「放したらまた流されますよ！」

確かにハヤテくんの言う通りだ。今手を放せば便器に溜まった水に落っこちて紙と一緒に下水へ流されてしまう。それだけは避けなければならぬ。私は我慢した。

「——って、このままこうしてても意味が無いんじゃない？」

私の予想通りに白い物体が私たちを便器に溜められた水の中へ連れて行く。

「どうすんのよ!？」

頭上に見える天王州さん悪のお尻が視界から外れると同時に排水される私たち。下水管を通ってどぶへと放り込まれた。

「最悪ね」

「ゴミ臭いですわ」

「後で三人でお風呂に入りましょう」

「そうね……って、何でそうなるのよ!？」

「私とハヤテは毎日一緒に入ってますわ」

「貴方には恥じらいというものが無いの!？」

「相手が愛する男なら平気ですわ」

「と、兎に角ここを出しましょう」

私たちはどぶの外へ出た。すると体が等身大に戻った。

「さあ、天王州さんを倒しに行くわよ。ああ、貴方のことじゃないわよ」

「分かってますわ!」

私たちは学院へと戻った。

体育館では生徒たちが後片づけをしている。

「天王州さんはどこかしら?」

辺りを見渡す。

「きつとトイレじゃないでしょうか」

私たちが女子トイレの扉を見やると、とても苦しそうな天王州さん悪が出て来た。

「はあ……はあ……うつ!」

天王州さん悪はこちらを見た。

「貴様らがそいつを解放したせいで……!」

天王州さん悪はそう言うのと幼児体型になってしまった。

「ハー、カー!」

幼児体型の天王州さんが無数の光弾を一带に放った。

「きゃああああ!」

逃げまどう生徒たち。

「ウケケ!」

幼児体型の天王州さんが目にも留まらぬ速度で襲いかかってきた。

「きゃあ!」

「うわあ!」

「ぐわっ!」

私たちは吹っ飛ばされた。

「あれが純粹?」

「おそろくは」

「カー!」

天王州さん純粹が床に腕を突き刺した。

「飛び上がった!」

私たちは立ち上がると直ぐに高くジャンプした。それと同時に私たちが居た場所から腕が突き出てくる。

「どうして分かったんですの?」

「ドラゴンボールのゲームで魔神ブウ純粹が同じ技を使うんだ」
「でも私たち元気玉出せないわよ？」

「………」

私たちは言葉を失った。

「兎に角数で押し切りましょう！」

私たちは着地と同時に天王州さん純粹に接近する。

天王州さん純粹は予測出来ない動きで私たちを圧倒する。

「なんて強さなの！」

「勝てませんよこんなの。いつそのこと降伏しましょう」

「ダメよ諦めちゃ」

私たちは天王州さん純粹に迫った。

「カー！」

天王州さん純粹が伸縮自在の腕で私たちを薙ぎ払う。

「くっ………！」

「うつ………！」

「ヒー、ハー！」

天王州さん純粹が無数の光弾を放った。

「きゃあ！」

「うわあ！」

「ぬわあ！」

吹っ飛ばされる私たち。

私はエクスカリバーを装備した。

「天王州さん、魔法は使える？」

「黒魔法なら修得してますわ」

「ハヤテくんは？」

「僕はヒナギクさんと同様に打撃専門です」

「使えないわね。バイキルトぐらい持ってなさい」

「バイキルトなら私がおかけしますよ」

「え？」

その声の主はマリアさんだった。

「マリアさん！」

「それで誰にかければいいんですか？」

「私にかけて下さい」

「分かりました。バイキルト！」

マリアさんの補助魔法で私の攻撃力が二倍になった。

「クケー！」

天王州さん純粋が私に光線を放ってくる。

「ぐっ！」

後方へ吹っ飛ばされた私は空中で体勢を整えて巧みに着地する。

「きあいためよ！」

きあいためアビリティーで気合いをためた。

「ピオリム！」

マリアさんの魔法で私は倍速に。

「ボミオス！」

マリアさんの魔法で天王州さん純粋が鈍足に。

私はきあいためを連続で行いテンションをマックスまで上げた。

「うわああああ！」

目にも留まらぬ速度で天王州さん純粋に接近して切りつけた。

ズババツ！——天王州さん純粋に九万九千九百九十九のダメージ。

「天王州さん！」

「マダンテ！」

天王州さんの全ての魔力が暴走して爆発を起こす。

天王州さん純粋に∞のダメージ。

天王州さん純粋は大爆発を起こし跡形もなく消え去った。

「あの、天王州さんのMPって幾つ？」

「∞よ」

「何そのチート！？」

その時、私はクルクルと目を回してその場に倒れた。

「ヒナギクさん！」

ハヤテくんが駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか!？」

「これが大丈夫に見える？」

「今すぐ病院に!」

そこへ天王州さんがやってくる。

「天王州さん、ハヤテくんをお願い」

「ヒナギクさん？」

天井が光り、頭に輪っかがついた白い翼を生やした少年が現れて
ゆっくり降りてくる。

「お迎えが来たみたい」

「え？」

天使の少年が私の手を掴み、肉体から私の精神を引っ張り出した。

「ヒナギクさん! ヒナギクさん!」

下でハヤテくんが私の肉体を揺さぶっている。

「ハヤテくん、幸せになつてね」

「ヒナギクさん、死んじや嫌です! ヒナギクさん!」

ハヤテくんが私の肉体を抱き締めた。

私はハヤテくんを笑顔で見下ろしながら天へと昇っていった。

それから六年の歳月が過ぎた二十十年某月。神様から新たな命を
授かった私は、杉並区の産婦人科で赤ん坊の姿で出生した。

「おぎやー! おぎやー!」

元気よく産声を上げる私。

「お父さん呼んできて」

看護婦さんが外で待つている父親の下へ向かう。

「天王州さん、赤ちゃんが産まれました! 元気な女の子です!

お会いになつてあげて下さい!」

看護婦に連れられて父親が入ってきた。私はその姿に見覚えがあ
った。水色短髪で女の子のような顔をしたその人の名は――

「おめでとう、アーたん」

私の大好きなあの人が母親に声をかけて私の顔を覗く。

彼は天王州姓になっていた。ならば母親は必然的にあの人になる。

「ハヤテ、抱いてみせてよ」

聞き覚えのあるその声に応えて彼が私を抱いた。

「私たちの子どもなのに桂さんに似てるわね」

「その人の名前は出さないって約束だったでしょ。けど本当に似てるね」

「決めた」

「何を？」

「その子の名前」

「へえ、どんな？」

「ヒナギクよ、天王州 ヒナギク」

「どうして？」

「私ね、数日前に夢を見たの。その夢では桂さんが私たちの子に生まれ変わるの。だから、もしかしたらその子は彼女の生まれ変わりかも知れないわ。それでその名をつけようと思って」

「そっか。もしこの子がヒナギクさんの生まれ変わりなら喜ぶかもね。けど僕も候補があるんだ」

「どんな？」

「ハルナだよ」

「ハルナ……いい名前ね」

「でしょ。この名前にしようよ」

「ハヤテが言うならそうしますわ」

「ようし！ 今日から君の名はハルナだ！」

私は父……ハヤテくんニツコリと笑ってみせた。

「気に入ったみたいだよ、ハルナ」

うん、気に入った。

「天王州さん、赤ちゃんをお風呂に入れてあげて下さい」

「あ、そう言えばヌルヌルでした」

ハヤテくんが用意された桶の湯に私の体を浸けて体液を綺麗に洗い流す。

「それでは体をよく拭いてお洋服を着せてあげて下さい」

「はい」

ハヤテくんが私を湯から出して体を拭き、オムツを穿かせて洋服を着せる。

何だかポカポカして眠たくなってきた。

「眠そうだね、ハルナ」

ハヤテくんが私を籠に寝かせた。

「お休み、ハルナ」

私は目を瞑って眠りに就いた。

二千二十六年某月某日。私は練馬の3LDKの家でハヤテくんが真っ黒に染まった剣のような物のお手入れをしているのを目撃した。

「それは何？」

「これ？ お父さんの形見」

「形見？」

「高校生の時、お父さんのお友達が、お母さんを命懸けで助けてくれた時に使った伝説の剣なんだ」

これひょっとしてエクスカリバーか？

「何で真っ黒なの？」

「それはね、あの後お友達が亡くなって——」

ハヤテくんは私が死んだ後のことを語り出す。

葬式の日、お坊さんのお経が終わって私の肉体が火葬場へと運ばれた時のこと。

「それではこれから火葬に入りますので、皆さんには別室へ移っていただきます」

そう言って従業員が棺を炉の中へ入れようとした時。

「待って下さい！」

ハヤテくんの声に従業員の手が止まる。

「あの、これも一緒にお願ひ出来ますか？」

ハヤテくんがエクスカリバーを取り出す。

「ちょっと君、その物騒なものは何ですか!？」

「これは故人の愛刀です。だからこれも一緒に向こうへ持って行ってもらいたいです」

「そういうことなら許可致しましょう」

ハヤテくんがエクスカリバーを棺に入れた。

「もう他にないですね？」

「はい」

棺は炉の中へ入っていった。そして、数時間炎で燃やし、肉体が骨だけになったところに取り出してみると、エクスカリバーは真っ黒に焦げてはいたが、その形をしっかりと保っていた。

「バカな! あの高温に金属が耐えられる筈が!」

「どうやら彼女は持つて行かなかったようですね。これは僕が引き取りましょう」

「——という訳で真っ黒なんだ」

「そんなことがあったんだ。でも何で溶けなかったのかな」

私は黒こげエクスカリバーを掴み取った。

「蘇れ、エクスカリバー! なんてね」

「ハルナ、どうしてその名を!？」

「何となく言ってみただけだよ。そういう名前なんだ」

「何だ、ただの偶然か」

その時、黒こげエクスカリバーが光に包まれた。

「何!？」

発光現象が治まると、さっきまで真っ黒だったそれが、以前の輝きを取り戻していた。

「そんなバカな! 僕が言った時は何も起きなかったぞ!」

「懐かしいわ。二十年ぶりくらいかしら」

私は輝きを取り戻したエクスカリバーを振るった。

「切れ味はどうかしら。何か無い？」

「ハルナ!」

ハヤテくんが怒号を浴びせる。

「それを返すんだ！」

「嫌だ。だって私のだもん」

「返せと言っただろ！？ それはヒナギクさんのだ！」

ハヤテくんは怒られた。

そこへ母のアテネが来て言う。

「夜中に五月蠅いですわよハヤテ！ 騒ぐのでしたら昼間にしなさい！」

「でもハルナが！」

アテネが私の持つエクスカリバーを見る。

「この剣はハルナに差し上げますわ」

「何で勝手に決めるんだよ？ それは僕の形見だぞ」

アテネはハヤテくんに向き直る。

「私に異見するの？」

「エクスカリバーは僕の持ち物なんだ。僕が異見して何が悪い」

「貴方の物は私の物、私の物は私の物ですわ！」

「そんな横暴な！」

「文句があるなら今すぐ出て行きなさい！」

「お母さん、もう十分よ」

アテネは踵を返した。

「ハヤテ、ハルナからそれを取り上げるようなことをしたら承知しませんからね」

そう言っただけでいくアテネ。ハヤテくんは恐怖で竦み上がった。か、返すよ」

私が差し出したエクスカリバーをハヤテくんが掴むと電流が流れた。

「ぎゃああああ！」

麻痺して倒れるハヤテくん。

「だ、大丈夫？」

心配そうに見据える私。

「何とか……」

「これ、私が持つてていいかな？」

「そんな危ないもの要らないよ」

「有り難う」

「ハルナ、ちよつといらっしゃい」

寝室でアテネが呼んだ。私は彼女の下へ向かう。

「何？」

「貴方に一つ質問がありますわ」

「質問？」

「ズバリ、貴方は桂さんですね」

「な、何言ってるのよ？ 私は天王州 ハルナよ。そもそも桂って誰？」

「とぼけても無駄ですわ。これを見なさい」

アテネが鏡を差し出した。そこには桃色長髪の端正な顔立ちの少女が映っていた。

「お母さん、これ変よ。私の髪は金なのに鏡の中の私はピンク色だったわ」

「これは普通の鏡ではないの。ラーの鏡といって真実の姿を映し出すのよ」

「それドラクエシリーズに出て来る道具ね」

「ハヤテには黙っていてあげますから、正直に仰いなさい」

「いつから気付いてたの？」

「貴方が白皇に入学した時からですわ。初めての学校なのに敷地内を庭のように知り尽くしていましたわ」

「そ、そういえばそうだったわね。でもそれだけじゃ私が生まれ変わらだつて分からないんじゃない？」

「高いところが苦手、初めての剣道部でプロ顔負けのプレイ、他にも前世と条件が一致するのが沢山ありますわ」

「少し抑えた方がよかったですわ」

ガチャリと扉が開きハヤテくんが入ってきた。

「ハヤテ！？」

「全部聞こえたよ、アーたん」

「そうですか」

ハヤテくんが私を見据える。

「どうして言ってくれなかったんですか。あの時ちゃんと言ってくれれば怒鳴らなかったのに」

「だって本当のこと話したら、お父さんは私のことをハルナではなくヒナギクとして見るんじゃないかと思ったから」

「ヒナギクさん……」

「お父さん、私はヒナギクじゃなくてハルナよ」

ハヤテくんが私を抱き締めた。

「ちよつ、何よいきなり？」

「ヒナギクさんにまた逢えて嬉しいですよ」

「ハヤテくん……」

「ヒナギクさん、僕はヒナギクさんのこと、今でも好きですよ」

「ちよつとハヤテ、それは初耳よ」

「私もハヤテくんのことが大好き」

ハヤテくんは私を放した。

「でもどうして前世の記憶があるんです？」

「神様がくれたの。二人を伝説の剣で守るようになって」

「そっなんですか」

「そういうこと。だからこれからもよろしくね」

「はい！」

Happy end .

（後書き）

作者の愛するヒナギクさん（笑）が死んでしまいました。ご冥福をお祈り致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8552k/>

ハヤテのごとく！～史上最悪の危機！天王州 アテネをぶっ倒せ！～

2010年10月8日10時30分発行